

〔書 評〕

多田とよ子著

『歩き続けた女性たちの草の根労働運動
—多田とよ子さん百寿記念著作刊行会編』
(富士社会教育センター、2025年)

ごとう かよ
後藤 嘉代

(労働調査協議会 主任調査研究員)

著者の多田とよ子さん（元ゼンセン同盟常任中央執行委員・婦人局長）は、この11月に百寿を迎えらえる。多田さんにはこの『労働調査』にも女性労働問題について何度かご寄稿いただいている。引退され、90歳を過ぎても、後輩たちに書き残しておきたいことがある、と執筆を続けられていたという。

本書は、2023年～2024年に実施したオーラルヒストリーの内容とともに、これまで多田さんが執筆された原稿を編集し刊行したものである。

多田さんは、1949年に全織同盟の機関誌『友愛』の編集アシスタントとして採用され、機関紙『全織』の編集を経て、寄宿舍対策部に異動した。当時の全織同盟の組合員は、繊維産業で働く10代の女性を中心で、寄宿舍対策部はそうした若い女性たちが生活する寄宿舍の生活環境の改善のための部署である。当時の寄宿舍の生活を現代の私たちが想像することは難しいが、1951年の第1期寄宿舍改善運動では、「どんぶりをおひつに」をキャッチフレーズに主食の盛り切り廃止を要求するなど寄宿舍の民主化に向けた取り組みが行われている。その後、多田さんは寄宿舍対策部長、婦人対策部長、婦人局長としてゼンセンの女性運動のリーダーとして活躍された。本のなかではゼンセンの様々な女性にかかわる取り組みが出てくるが、なかでも印象的なのは、1974年の母性保護統一闘争である。この年は不況で賃上げができず、そのかわりに組織全体で母性保護闘争に取り組み、実態調査をもとに有給の生理休暇やつわり休暇、育児休職など要求項目をかかげ、成果をあげている。多田さんは、1984年にゼンセン同盟の役員を退任されているが、女性リーダーからみた労働戦線の統一や男女雇用機会均等法制定までの経緯にかかわる内容は、労働組合運動、女性労働運動の歴史として大変興味深い。

また、「女性労働運動はヨコにつながる連帯運動」と書かれているように、本書では、全国でゼンセンの活動を担い、支えた女性たちが多く登場し、当時の女性活動の状況を見て取ることができる。日本の労働組合の組合役員は現在もおお男性が中心ではあるが、組合書記として多くの女性が組合活動を支えてきたことも事実である。多田さんは、本書のなかで、ゼンセンの本部書記局で実務を担当した女性たちの記録を残しており、その内容からは書記局で働かれた女性たちに対するあたたかな心情を感じることができる。

また、本の後半では、多田さんの事績とともに、ゼンセンを中心とする女性運動の年譜が掲載され



ている。年譜からは、産別のなかで女性役員の数が変動する過程や、女性活動を担う部局の変遷を確認することができ、今後のジェンダー平等の取り組みを考えるうえでも、貴重な資料といえる。労働組合運動にかかわる資料は、個人によって保管されているケースも少なくなく、時間が経過するにつれて、散逸してしまう。運動の中枢を担ったリーダーの記録を文字にして形に残す作業は、労働組合だけでなく、組織率の低迷とともに研究者が減少した労働組合研究や労使関係研究にとっても重要である。

2000年代のはじめ、当時ゼンセン同盟の職員になりたてだった私は、一度だけ多田さんにご挨拶をし、「頑張ってください」と声をかけていただいた記憶がある。その後、20年以上が経ち、オーラルヒストリーのヒアリングで、再びお会いできる機会ができ、直接お話をうかがった。当時のお話をされる多田さんの凛とした姿から、労働組合運動、女性労働運動への強い思いを受け取ったように思う。

本書を通じて、先輩たちの活動によって「今」があることを実感すると同時に、いまだ変わりきれていない部分にも改めて気付かされた。今、ジェンダー平等に取り組む組合役員の皆さんに、ぜひ手に取っていただきたい一冊である。

多田とよ子さんは、2025年9月下旬に逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

これまでのご厚誼に感謝申し上げます。